

キク親株のロックウール耕による採穂期間の拡大と穂の収量性、生産費

[要約] キクの親株をロックウール耕で養成することにより、慣行の土耕と比較して圃場1㎡当たり採穂数が1.4～1.7倍に増加する。また、「秀芳の力」では採穂開始から3カ月後でも苗質の低下が小さいことから、親株からの採穂期間の拡大が可能である。「秀芳の力」の1穂当たり生産費は、8カ月間採穂する場合には6.3円で慣行とほぼ同じである。

園芸研究所・野菜花き部・花き花木研究室					連絡先	092-922-4111	
部会名	園 芸	専門	育苗	対象	花き類	分類	普及

[背景・ねらい]

電照ギクの苗生産は、切り花生産者が専用親株を養成し、品種や作型に応じて摘心、採穂することによって行われている。しかし、慣行の土耕による苗生産では、親株1作当たりの採穂時期や期間が春夏季の2～3カ月間に限定されることや、親株養成から育苗までの労働時間が総労働時間の10%を超えることが経営規模拡大の制限要因の一つとなっている。そこで、秋ギク「秀芳の力」と夏秋ギク「精雲」について、長期間採穂が可能な親株養成技術を確立するため、ロックウール耕による穂の収量性、苗定植後の生育および穂の生産費を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1 電照ギクの親株をロックウール耕で養成することにより、圃場1㎡当たり採穂数は慣行の土耕と比較して「秀芳の力」では約1.7倍、「精雲」では約1.4倍に増える。特に、「秀芳の力」では採穂開始後の7月と低温期に向かう10月に、また「精雲」では5月に採穂数が多くなる(図1)。
- 2 「秀芳の力」の親株のロックウール耕で得られた苗の生育は、露地土耕に比べて7、8月採穂では差がないが、採穂期間が2カ月を超える9月下旬採穂では草丈が長く、茎葉重が重く、苗質が良い(表1)。一方、「精雲」ではロックウール耕と施設土耕の苗では生育に差がない(データ略)。
- 3 「秀芳の力」の親株をロックウール耕で養成した場合の1穂当たり生産費は、露地土耕と比較して、採穂期間が6カ月(5～10月採穂)では7.8円でやや高いが、8カ月(5～12月採穂)では6.3円で同等である(表2)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 電照ギク産地における苗の省力、大量生産のための技術資料として活用する。
- 2 キク親株のロックウール耕により苗生産の分業化が図られ、育苗労力の削減が可能となる。
- 3 「精雲」のロックウール耕による同一親株からの採穂期間は3カ月が限度である。

[具体的データ]

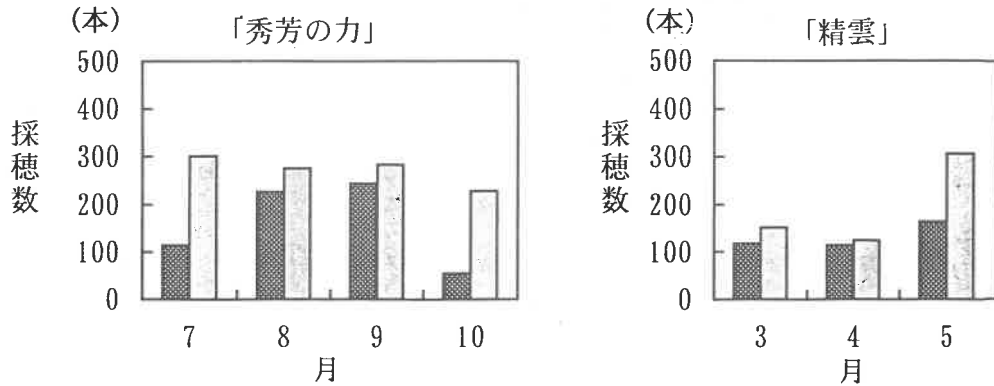


図1 親株の養成方法と1㎡当たり月別採穂数(平成8、9年)

- 注) ①「秀芳の力」は5月中旬定植、「精雲」は1月下旬定植。
 ② : 慣行(「秀芳の力」は露地土耕15.4株/㎡、「精雲」は施設土耕19株/㎡)
 : ロックウール耕(19株/㎡、培養液は大塚液肥1,2,5号を用いてEC1.5dS/㎡に調整後、1日2回、それぞれ2分間給液、1株当たり給液量は約100ml)。

表1 親株の養成方法と苗定植後の生育(平成8年)

親株の養成方法	採 穂 日								
	7月4日			8月1日			9月27日		
	草丈	葉数	茎葉重	草丈	葉数	茎葉重	草丈	葉数	茎葉重
	cm	枚	g	cm	枚	g	cm	枚	g
慣行(露地土耕)	36.2	32.8	43.4	37.2	21.6	25.2	23.1	15.5	10.9
ロックウール耕	35.9	27.9	42.4	35.8	20.4	25.5	30.2	16.6	14.1
T検定	NS	*	NS	NS	NS	NS	**	NS	*

- 注) ①品種「秀芳の力」、ロックウール耕の培養液管理は図1と同じ。
 ②定植直後から深夜4時間の暗期中断を行って5週間後に調査、茎葉重は生体重。
 ③T検定: NS、*、**はそれぞれ有意差なし、5%および1%で有意。

表2 親株の養成方法と穂の生産費(平成9年)

親株の養成方法	採穂期間	㎡当たり 定植株数	株・月当た り採穂数	10a当たり 採穂数	10a当たり 生産費	1穂当たり 生産費
慣行(露地土耕)	6~7	15.4	10.4	320	1,962	6.1
ロックウール耕	5~10	19.0	14.3	1,630	12,753	7.8
"	5~12	19.0	14.3	2,173	13,642	6.3

- 注) ①八女地域農業改良普及センターと八女市花卉園芸組合の調査(平成9年)に基づき、秋ギク「秀芳の力」で試算。
 ②土耕の採穂期間は慣行では2カ月以内。
 ③ロックウール耕は雇用労働を用いて硬質板ハウスで栽培

[その他]

研究課題名: 親株のロックウール耕栽培技術

予算区分: 国庫(地域重要)

研究期間: 平成9年度(平成8~9年)

研究担当者: 谷川孝弘、國武利浩、松井洋、小林泰生

発表論文等: 平成8~9年度園芸研究所野菜花き部花き花木研究室試験成績書